

教育的指導法についての一考察

～「ステージ理論」の検証

…経営・人材育成・教員養成における実践からのアプローチ～

教職支援センター 杉岡 義次

抄 録

現在、多くの課題を抱えた学校教育の現場の実践や様々な経営実践を見たときに、一つの指導法が見えてくる。その指導法の一つの考え方として、「ステージ理論」があり、本論にてそれらを検証していく。本論は、様々な教育の現場での実践から、人材育成や生徒指導、学校経営を行う上で、その指導実践の中核をなしてきた指導法についての一つの考え方である「ステージ理論」の検証を行い、その理論が指導法の一つとして有効であることを述べていく。

「ステージ理論」とは「人は、自らのステージを与えられることによって、生きていこうとする」という考えに基づいた一つの教育的指導法である。この「ステージ」とは、まさしく「舞台」をイメージし被指導者の活動する場所や機会を示し、そこには「観客」である被指導者との関係性を持った人間の存在が必要であり、その関係者が被指導者に対して「拍手」としての何らかの評価や激励を与えることによって、被指導者はよりよく活動を続けるものであると考えた。この研究はこのような「ステージ理論」という指導法の構造や実践を検証していくものであり、教育的指導の一つとなることを述べるものである。

キーワード

「指導法」「ステージ理論」「観客」「拍手」「評価」

はじめに

多年に亘って様々な課題を抱えた教育現場での実践の中で、常に実践上の土台となる発想の基本となっている考え方がある。それが、「ステージ理論」という考え方であり、様々な現場での教育課題を乗り越えている実践やその構想に、その「ステージ理論」が見つけられる。これらを検証していくことで、より効果的な教育的指導法へとつなげていくことを求めた。

「ステージ理論」は、2004年に文部省における中堅教員中央研修による学校経営ワークショップに於いて作り出した造語であり、未発表の研究論文である。

1. 「ステージ理論」という考え方

「人は、自らのステージを与えられることによって、生きていこうとする」
そのステージに必要な要素は、その人が演じられるステージ(場面)と拍手(評価)を送る
観客の存在である。 (「ステージ理論」 杉岡義次)

(1) 『人は』とは、あらゆる人を対象にしている

幼児期・児童期は、身近な大人が観客としての役割を果たすものであり、その時期の身近な大人の評価が適切であるほど、行動と結果の随伴生に従い、意欲に満ちた好奇心旺盛な性格を形成すると思われる。

少年期・思春期・青年期は、基本的な欲求としての承認の欲求や関係性を求める欲求が高まる時期であり、多くの人の中で承認を得ることが、自己肯定感の醸成とかかわり、成長過程の中で大切であり、児童生徒の通学意欲とかかわると考える。とりわけ思春期の自我に芽生えた基本的欲求の旺盛な中学生には、特に大切な視点でもあり、全ての中学生に大小にかかわらずステージをつくる必要があると考える。この点については後述するが、生徒指導上や学級経営上の重要な視点となるものである。

成人期としてまた社会人としては、それぞれの大人として自己実現が成人期の課題でもある。社会の中でまた家庭の中で自己実現をしていくのは、当然として自分の立場に対する他者からの評価である。日本ではまだまだ社会人としては、その評価が仕事というものの中にあり、そこでのポストやペイで判断されるところが多くある。しかしながら、自己実現を考えたときに、いかにその社会の中でステージに登り、快い評価を得るにかかっている。ここに社会人の自己実現の難しさがあるが、ここでの論述はテーマとの関係から控える。また、家庭人としての大人の自己実現についても、家庭人としてのステージの設定と家族からの適切な評価によるものであると考える。前段同様にここでの論述はテーマとの関係から控える。

高齢期、退職後期、第二の人生期においても同様に、健康との関わりを考慮しながら社会や家族の中でのステージの必要性は、いうまでもなく人生後半の活性に大きくかかわることは明白である。

このように、「ステージ論」の『人は』あらゆる人を対象に述べたものであり、その根拠を示した。

(2) 『自らのステージ』とは、その人本人が主体的に活動できる場面の設定である

『ステージ』とは、対象者が主体的に活動する場面を示したものであり、それはできる限り個別のものである方が望ましい。例えば、体育大会の集団演技や学芸会、合唱コンクール

に於いて多くの児童や生徒の中であっても、保護者が望遠レンズで自分の子どもにだけフォーカスして動画や写真を撮るようなものである。できる限り主体的な個人の場面をつくっていく、その場면을『自らのステージ』とした。当然のことながら、このステージは、社会的に道徳的に認められるものであれば、好ましいものではあるが、必ずそのような場合でないことも大いにあり得る。例えば、非行少年に関して「暴走族に属する少年にとって、集団で行動しているときの一体感や高揚感は、家庭や学校では得られない承認欲求を満たしてくれたり、疎外感や劣等感を紛らわしてくれたりすることが多く、そこが唯一の『居場所』となってしまう」ということを小林寿一氏は「少年非行の行動科学」から述べており、まさしくこれも与えられた自らのステージの一つであることに間違いは無い。

(3) 『生きていこうとする』とは、意欲的に主体的に活動している様子を表している

この場合の『生きていこう』とは、対象者がその中で活動していくことであり、意欲的であったり、道徳的であったり、社会に認められるものであったり、またその逆であることもある。ただ、普段の何気ない生活より、より意欲的に活動をしている様子を表したものである。残念ながら、このことは対象者が自ら自覚するか、自覚しなければ無意識のうちに表れるものであり、その場合は行動の結果から他者が推測する以外に明らかにする方法は今のところはないと考える。

(4) 『ステージに必要な要素』とは、「ステージ理論」を可能にする2つの要素である

『ステージに必要な要素』とは、ステージ論を展開し、その効果を得るのに必要な「場面の設定」と「適切な評価を行う対象者と何らかの関係を持った他者である観客の存在」という2つの要素を述べている。集団指導と個別指導の指導原理の視点から言うと、「場面の設定」は個別指導であり、集団指導は「観客」への指導と言うこともできると考える。より「ステージ理論」の効果を考えるならば、この集団指導と個別指導の指導原則である相互作用が必要である。

(5) 『その人が演じられる場面』とは、対象者一人が中心となっている場面である

『その人が演じられる場面』とは、前段の『自らのステージ』のことであり、対象者一人だけが中心となって行動している場面であり、それを受け入れている、または関係している他者が存在している場面である。

(6) 『評価を送る観客の存在』とは、対象者の活動や行動場面を受け入れ、何らかの励ましや賞賛を含んだ評価をメッセージとして送る他者の存在をいう

『評価を送る観客の存在』とは、対象者の活動や行動場面を受け入れ、何らかの励ましや

賞賛を含んだ評価を行う他者の存在をいう「ステージ論」の中で最も重要な要素であると考えられる。「ステージ」をつくることはいろいろな実践の中で表されていることではあるが、ここにその評価を加えることが、この指導の大切な視点である。また、観客は決して人数の多さが優れているとは限らず、大切な視点は、ステージで演じる被指導者が観客と感じるかどうかであると考えられる。

2. 検証1 「学校経営の中でのステージ理論」

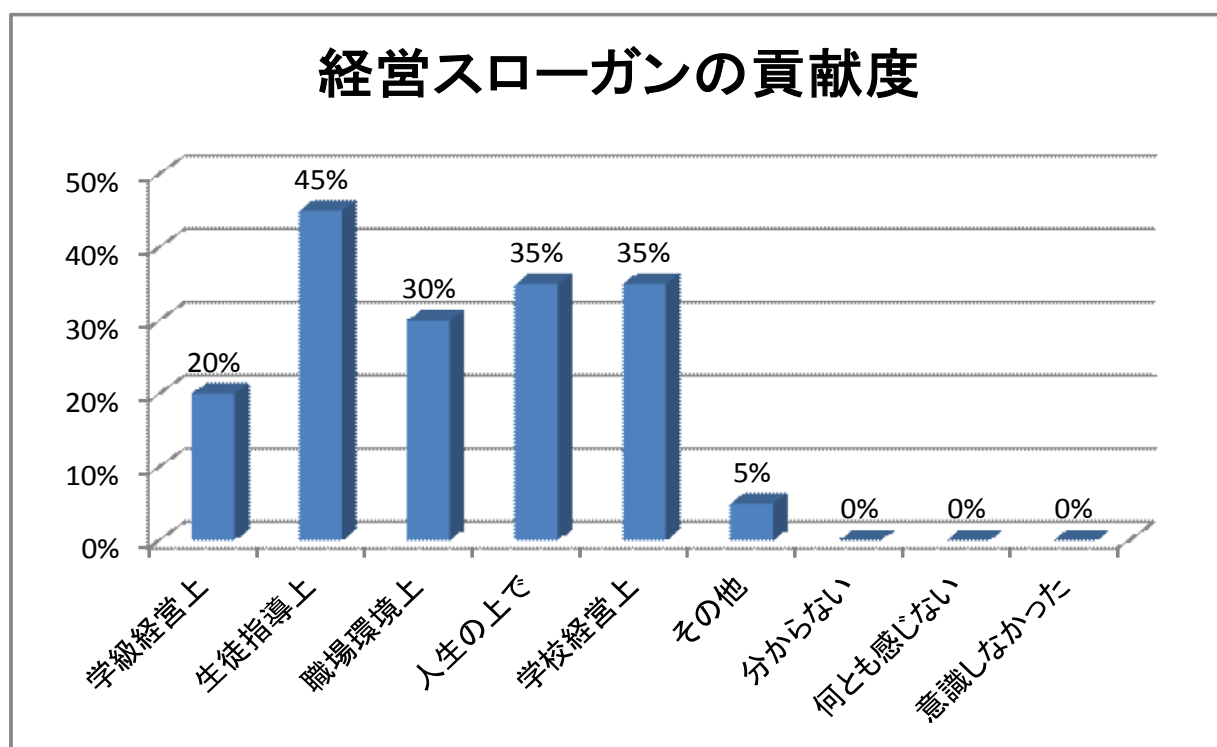
(1) 学級経営・生徒指導・組織運営としての「ステージ理論」の位置付け

学校経営の中で、年度当初に管理職がその年度の経営方針を述べる。具体的な経営の方針と同時に経営や指導を進めていく行くときの指標となるスローガンを「ステージ理論」と関わり設定した。この中学校は、未だかつて無いほどの小学校での大きな荒れを経験した児童を受け入れるという課題を持ちながらも、6年間の実践をつないできたのは「ステージ理論」の浸透であったと考えている。この理論をもとに次のような経営スローガンを示した。

「すべての人に、ステージを」

[2006年杉岡義次より]

このスローガンが職員にどの様に影響したか、当時の職員に調査をおこなった。



・結果、[学級経営上役だった20%、生徒指導上役だった45%、職場環境上役だった30%、人生の指標となった35%、学校運営上・組織運営上35%、その他1%(採用試験)、分からない0%、何とも感じない0%、意識しなかった0%]となった。これらのス

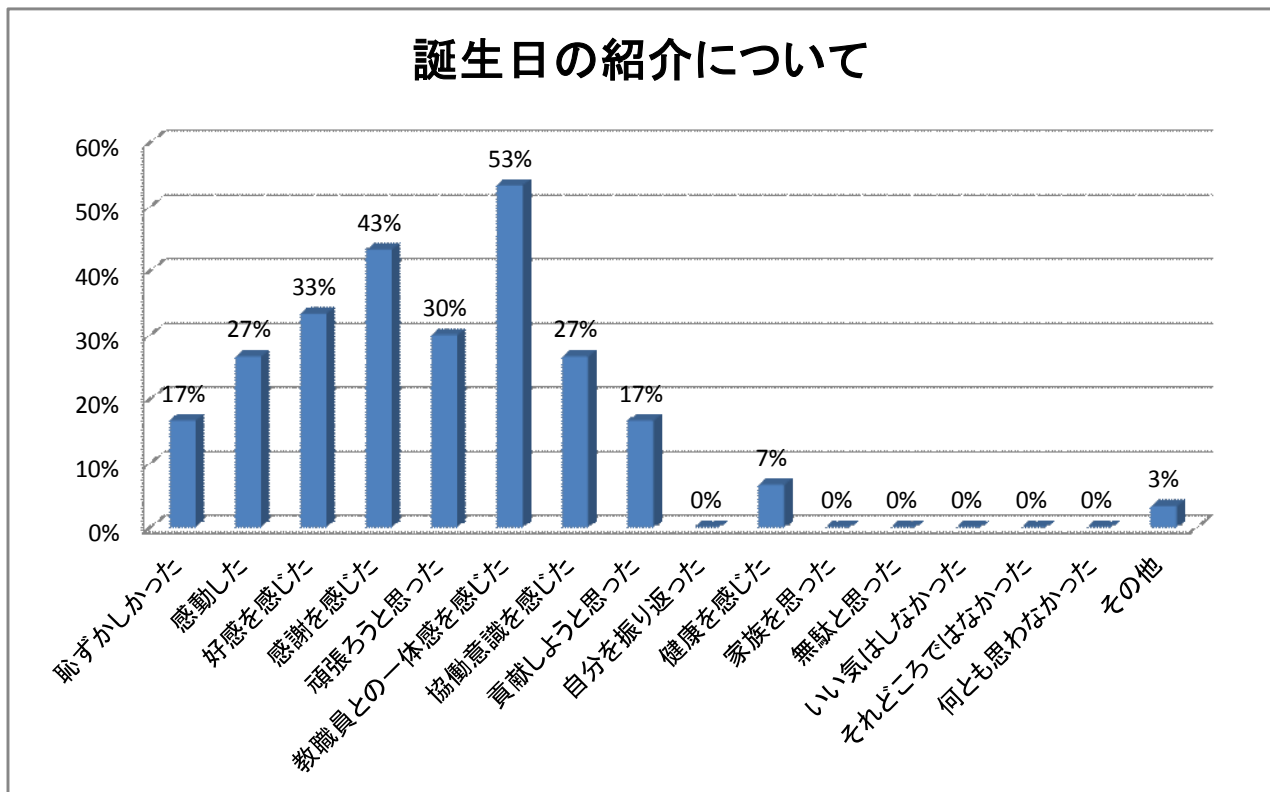
ローガンは、「ステージ理論」の説明を行わずに中学校現場への経営スローガンとして述べたものであり、上記の経営スローガンの貢献度から、生徒指導上が45%で最も高く、次いで、学校経営上・人生の指標が35%となっている。自由記述欄では、「組織の方向性が分かりやすい」「経営方針として分かりやすい」「とても役だった」「気を付けて過ごすようになった」「学年経営・指導の指針となった」「役だった。経営の一貫性が職員に浸透した」「この言葉は素晴らしい」「共感した」という回答が記入されていた。また、貢献度がないとした否定的な回答はいずれも0%であった。

これらは、「ステージ」という個人の活躍場所(居場所よりもう少し積極的なニュアンスである)が、教育の指導上や学校経営上、大切であるとすべての職員が感じていたことを示している。このことは、「ステージ理論」を進める上での大きな裏付けとなっている。

(2) 組織の活性化としての「ステージ理論」の実践

「ステージ理論」の実践として組織運営上の効果を検証していくために、次のような実践と調査を行った。

ある中学校現場に於いて、教職員の誕生日の日の職員朝礼に、職員全体に誕生日であることを紹介するという実践である。「ステージ理論」としては、誕生日である教職員に紹介という「ステージ」を与え、「観客と拍手」は、教職員が「観客」であり、「拍手」は職員からのお祝いの拍手であり、校長からのメッセージとプレゼントである。教職員には個人的な内容であり、しかも余りクローズアップしない場合もある内容である。そのことを教職員の



全体の場にあげることにより、個人一人の「ステージ」を設定していると考えられる。これらの実践は6年間続けられ、次のような教職員の意識調査の結果を得られた。

・結果、[恥ずかしかった17%、感動した27%、校長に好感を感じた33%、校長に感謝を感じた43%、何となく頑張ろうと思った30%、教職員(職場)との一体感を感じた53%、職場での協働意識を感じた27%、学校に貢献しようと思った17%、今の自分を振り返った0%、自分の健康を感じた7%、家族のことを思った0%、忙しいのに無駄と思った0%、いい気はしなかった0%、次の指導(仕事)等考えてそれどころではなかった0%、何とも思わなかった0%、その他3%(お返ししようと思った・命の誕生を意識した)]

最も多くのものが感じたのは、「教職員との一体感」で半数以上のものが組織の一員であることを意識している。次いで、プレゼンターに対する感謝や好感は43%・33%と多く、当然として考えられる結果ではある。ここで注目したいのは、「頑張り」「一体感」「協働意識」「貢献」というキーワードである、経営や組織運営上のプラスの感情が感じられている回答が多くを占めている。反対に、「無駄」「いい気はしない」「それどころではない」「何とも思わない」等の実践に対する否定的な回答は全く見られなかった。

このような結果から、「ステージ理論」を意識した「誕生日の実践」が、対象の教職員にとってプラスに働き、組織運営上に効果をもたらしている感情を持ったと考える。このことからこの実践が、組織経営上に於いて効果があり、その構造の中に「ステージ理論」の発想が見られ、「ステージ理論」が経営上に於いても、一つの指導法であることを示している。

3. 検証2「実践指導の中に見るステージ理論」

(1) 部活動場面での後輩の指導から

教育現場では、よく見られているエピソードの一つである。

平成の始まりの頃、小学校と中学校の連携が叫ばれ始められている頃のエピソードである。

部活動を指導している中で、なかなか活動に意欲が見られない生徒がいつも少しは出てくるものである。その部員の原因は様々ではあるが、多くは部活動の成績がそれほど芳しくない現状がある。しかし、日頃の活動で小学生には持ち合わせていない、専門的なスキルや体力が培われている部員がいる。このような現状の中では、中学生が小学生を指導するという場面を設定することにより、意欲的で無かった部員が小学生の指導に意欲的に活動をするという場面に多く出くわしている。このことは、日頃の部活動では、ステージが与え切れていない現状があり、小学生を指導する機会に、意識的にその指導の役割であるステージを与えることにより意欲的に活動をするというエピソードである。これは、その部員に指導場面という「ステージ」が準備され、小学生や小学校教諭からの「お礼」、部活動指導者からの日頃の活動では生まれにくかった「評価」が準備され、「観客」と「評

価」という構図が設定されていることが見られる。

同様のことが、部活動場面での新入生の指導の中にも多く見られることがあるが、現在では、小学校からすでに技術的に優れた生徒が多く出るようになり、必ずしもこのような指導場面が確保できるかは、厳しい現状があが、いずれにしても「指導する・教える」という行為自体に「ステージ」の要素が大きく、その評価が「観客」の構図となることは確かであると考ええる。

(2) 団士郎氏の「家族の練習問題3」より

団士郎氏の指導されているケースのエピソードの中にも、「ステージ理論」が見つけれられるものがある。

- ・「宿題」では、女子学生が、他の学生の助言を受け入れて、ぎくしゃくしている実家に突然戻って家族のお弁当をつくるというエピソードである。女子学生に「お弁当をつくる」というステージを与えた男子学生のアドバイスが一つの指導であり、その結果自分とは真逆の性格の妹からの電話と母親の喜びの涙という「観客の評価」がある。その結果、女子学生の永年の家族へのぎくしゃくとした感情が、雪解けのように変化が生まれるというものである。これもまた、「ステージ理論」のステージと観客という構図が見られる。
- ・「仮病」では、年老いた母親の受けたアドバイスと通勤寮にいる気がかりな娘の自立についてのエピソードである。これは、母親が仮病になり通勤寮にいる娘に買い物や料理といった「ステージ」を与え、その料理を母親が娘と共に食べながら、「楽しく食べる」という「評価」を娘に与えることにより、娘の通勤寮での生活が徐々に変化していくというエピソードである。これもまた、娘の料理というステージと、母親という観客の構図が見られる。
- ・「管理職」では、事件が起きて沈滞している児童福祉施設に、困難な児童の依頼がわざわざ持ち込まれるというエピソードである。これもまた、この沈滞している福祉施設に新たな「ステージ」を与えたことであり、そのステージとよく引き受けたという「評価」があり、職員全体が頑張り出し、児童福祉施設が活性化するというエピソードである。これもまた、ステージと観客という構図が見られる。

(3) 少年等立ち直り支援事業の現場から

京都府教育委員会の「少年等立ち直り支援事業」に係わり、支援団体を運営している現場からの視点である。

支援コーディネーターの藤木氏が新聞取材に対して、「非行に走ったり不登校に陥ったりする子どもたちの中には、授業について行けずに『学校に居場所がなくなった』『誰にも理解されずに見捨てられた』といった疎外感を感じる子どももいた。」という現状を報道取材

で述べている。『学校に居場所がなくなった』とは、ステージを失ったことであり、『誰にも理解されずに見捨てられた』ということは、「観客と拍手」という構図が失われたことを意味している。

この事業と関連してこのような事例がある。1年生から学校に適応しづらく、服装違反、エスケープ、外泊、教師反抗等を繰り返し、欠席気味であったA子の支援として支援団体を立ち上げ、校区地域の方を中心として支援コーディネーターの指導のもと、学校との連携の中で学習支援を開始した。A子は家庭環境も複雑で、母親と父親の間を行き来していた。気ままな行動が見えることもあり、教師の指導に従わないことも多く見られたが、地域の支援者の方の熱心な指導と母親への連携が力となって、A子のステージとしての学習支援を行う場所が位置づけられていった。このような取組の中で、A子は進路に向かって一定のがんばりを見せ、学校生活から大きく離脱することもなく、非行の道に入ることは避けられた。

このような事例を見たときに、A子のステージが支援団体により設定され、支援団体や支援コーディネーターが「観客」となり、励ましという「評価」を与えながら、A子への「ステージ理論」の構図を確立していったと考える。このことで、A子は支援コーディネーターや支援団体の地域の方を信頼し、与えられた一つの「ステージ」で頑張りだしたと考えられる。また、そのような「ステージ」の存在が、次の学校生活や進路希望という新しい「ステージ」を生み、「観客と拍手」を得て生きていくことになっている。

一つの「ステージ」は、次の新たな「ステージ」を生み、新たな指導の展開を見るものである。これが「ステージ理論」のダイナミクスでもあると考える。

4. 検証3「道徳の授業の中に見るステージ理論」

道徳の授業では、児童生徒が深く考え、その考えを発表交流することで、さらに深まるという指導方法がある。しかしながら、児童生徒が積極的に発表をしないという様な場面が見受けられるときがある。このようなことは、勿論指導する内容や発問の内容によるものも多くあるが、指導者(教師)と児童生徒との関係によるものも大きいと考える。このときに、発問では児童生徒に発表という「ステージ」を与えることで、そのステージに対する「観客」の役割は、この場面では教師の反応である。教師が待っていた発表内容とそうでない発表内容に、大きな反応の偏りがあったり、教師の反応に否定的な側面が強いと観客の「拍手」が少ないことになり、児童生徒はもう一度「ステージ」に上がろうとはしないことになる。すなわち、発表を積極的に行わず、交流が質の高いものとなっていけないということになる。つまり、道徳の授業として、一人一人が深く考えるという大切な作業が欠けることになり、ひいては教師のお説教のようなまとめになり、授業としての成立が危ぶまれる結果となる。したがって、基本的に道徳の授業では、「ステージ理論」の構図が大切であると考えられる。

そのことを踏まえて、「ステージ理論」を意識して、教職を目指す大学生に道徳の模擬授

業を行ったときの反応から、その検証を行った。ここに学生の反応を上げていく。

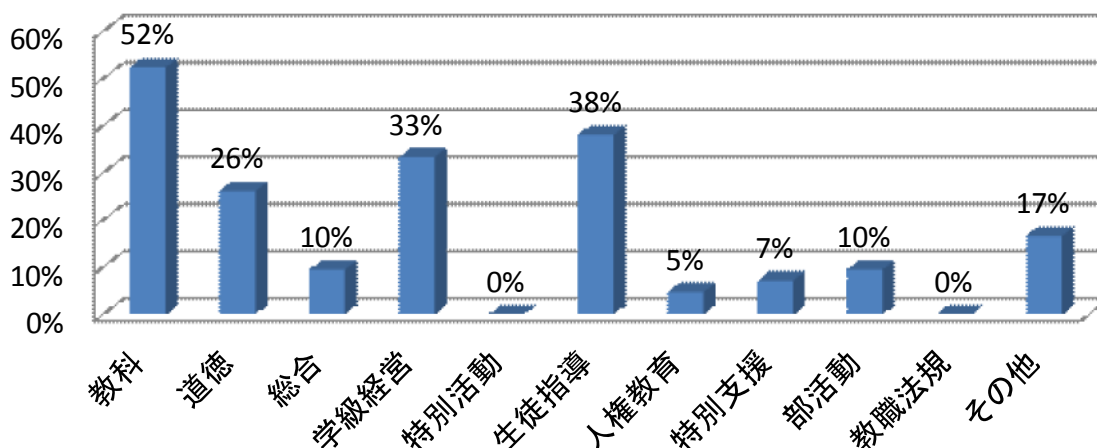
- ・さらに出された意見に対する教師からの受け入れるという姿勢も、自己肯定感や発言への意欲を沸き立たせる上で重要だと思いました。(教育3回男性)
- ・発表した時、緊張は少ししたが、答えがないので、自由に発言できた。先生も発表を聞いてくれている。肯定的に取り込んでくれることが、生徒目線ではとても嬉しい。発言しやすい環境づくりが大切だと思った。(現社3回女性)
- ・発表した時緊張しましたが、周りの人が自分の発言に耳を向けてくれていることでしっかり話そうと思いました。先生の受容する姿勢も安心感がありました。(通信3回男性)
- ・実際に当てられて発表するときは、自分の考えを述べるのでとても緊張してしまったくまと言えませんでした。言ったあと先生が優しくフォローしてくださったので、その緊張も少しは和らぎました。先生がフォローや認めてやることで生徒の気持ちも楽になるのだと思いました。(教育3回男性)
- ・先生の授業の進め方によって、自分自身が教材の登場人物になったつもりで、考える力や想像する力を最大限に引き出されたように感じました。(教育3回男性)

5. 検証4「教員養成の講義の中に見るステージ理論」

(1)教育実習中の学生の振り返りから「ステージ理論」の有効性

平成25年度の教育実習の訪問指導から、教育実習生に実習に際して準備しておけばよかった事項を、順位を付けて3つ選ぶことを質問及び質問紙にて調査したところ、次のような結果になった。

教育実習での振り返り



・結果、[教科教育52%、道徳教育26%、総合的な学習の時間10%、学級経営33%、特別活動0%、生徒指導38%、人権教育5%、特別支援教育7%、部活動(クラブ活動)10%、教職法規0%、その他17%(段取りや用具類等)]となった。

準備が必要だと感じているのは、教科指導であり、教科の専門性がより問われるところである。また、2位は生徒指導であり、3位は学級経営、4位は道徳の授業であると答えている。道徳の授業に関しては、必ず経験しているとは限らず、道徳の授業を経験した実習生の多くは、選択肢の上位を選んでいたことを確認している(データ上の分類の項目を設定していないので記入時の判断ではある)。

教科指導の専門性は、教材研究の構築に依拠するところが多く、指導の経験年数に大きな差が見られると考えられるが、教科指導を含め、生徒指導や学級経営、道徳教育等においては「ステージ理論」の指導方法が指導を行う上で、大きな効果を生むと考えられる。

これらの検証は、次の(2)の講義の振り返りから見られる。

(2)「ステージ理論」をもとにした教員養成の中等教育実習研究における参加型授業の実践から

平成25年度春・秋学期における中等教育実習研究の集中講義(1講座50名程度)において「ステージ理論」を意識した講義を展開した。特に、参加型授業として受講者の意欲や主体性を高めるために、順番に全員に発表を求めるという講義を行った。

「ステージ理論」は、全員の参加という「ステージ」を学生に与えることと、その「観客」の存在は講義を受講している学生全員と発表を受ける教師の存在であり、「観客の拍手」にあたるのは、講義をしている教師の「評価(反応)」である。この教師の評価が、否定的なものにならないようにすると同時に、すべての学生の発表に傾聴するというものである。講義では「ステージ理論」のことは何も説明せずに講義を行い、最後に講義についてのアンケートをとり、学生の振り返りとした。

以下に、「ステージ理論」を意識して行った参加型授業についての学生の感想を記述する。

- ・ただ講義内容を理解するというだけでなく、その講義手法についても、今後、自身が実習を行う際に目標となるものでした。(数学33歳男性)
- ・参加型授業をすることで、集中力を維持できた。(数学25歳男性)
- ・一人ひとりに発言する機会を与える授業の形式も面白く、すごく有意義な授業でした。(英語27歳男性)
- ・メリハリのある授業と、一人ひとりの意見を尊重してくれる授業スタイルはとても参考になりました。(英語37歳女性)
- ・何気なく展開されていた授業の中身も実習につながる構成となっており、とても勉強に

なりました。(数学24歳男性)

- ・参加型授業はやって楽しく、また自分と違う考え方が聞けていいと思うので、ぜひやってみたいと思った。(英語29歳男性)
- ・ずっと先生のペースだったのに、僕ら生徒には退屈じゃなかったし、聴きいれてもらえる授業というものが何となくですが分かったような気がしました。(英語21歳男性)
- ・新しい面白い授業を受けられました。こういう楽しい雰囲気 of 授業を受けたのは初めてだったのでとてもよかったです。自分が教える立場になった時もこんな授業ができたらいいなと思いました。(国語27歳男性)
- ・先生は一人ひとりの発言に対して、必ず肯定的に受け止め、言葉を返してくださっていると発言する勇気や自信が付き、とても良いなあと感じました。自分が教壇に立ったときに是非実践できるようにしたいです。(英語29歳女性)
- ・先生の授業はとても楽しかったです。どんな意見も認めてくださるって素晴らしいですね！「認められる」というのは、うれしいことだと分かりました。私もまずは、子どもの意見を受け止めて認めてあげる教師になりたいです。(英語41歳女性)
- ・いつも生徒の意見、回答にまず頷いて共感してくださり、安心感のある授業でした。(英語40歳女性)
- ・一番参考になったことは、否定をしないことです。30人以上を相手に質問をして、回答に対して一度も否定をしなかったように思います。複数の答えがありそうな質問の時には、出てきた答えを板書し、一意の答えが決まっている質問の時には、的を外した回答の時にも、「そういうのもあるなー」というニュアンスから少しずつ答えに近づけさせようとしているようでした。相手の尊厳を守りながら導くのが上手だと思いました。(数学24歳男性)

上記のように、受講生が講義の振り返りに於いて、「ステージ理論」を意識した参加型授業について、肯定的な感想を述べている。事前に、授業スタイルを説明せずに行ったにもかかわらず、上記の様な気づきのある講義になったことは「ステージ理論」という指導法が、有効な指導法の一つであることを検証している。

6. 検証5「社会の中に見るステージ理論」

(1) 企業に見る人材育成での「ステージ理論」

- ・自動車メーカーの日産を立て直したと言われているCarlos Ghosnによるゴーンテキストの著書のなかで、「日産の復活は、社員のモチベーションを刺激したこと」としている。「社員の威力を見くびってはいけない」等、社員のモチベーションの大切さを著書の中で述べている。また、集約される言葉として「Power comes from inside.」としている。こ

のことは、経営における社員のモチベーションの大切さを述べながら、社員にCommitmentをするという積極的な「ステージ」を与えている。ここにも、「ステージ」と「評価」＝「観客」という構図が見受けられ、そのことによって社員のモチベーションを上げたことになったのではないかと考える。

・外資系ではあるが、大手企業の取り組みに「誕生日に、花を贈る」「メッセージを贈る」と行った取組をおこなっているところがある。しかも、バイトの社員にも漏れずにそのようなことを取り組んでいる。Jeffrey. J. foxの著書においても、部下の誕生日に「命の誕生とこれからの命を輝かすためにケーキを贈ります」といったメッセージと共にケーキを贈ると行った実践が述べられている。いずれも、経営における社員のモチベーションを刺激するもので、それらの行為によって社員自身の存在の場「ステージ」が認められていることである。「ステージ理論」における「観客」にあたるものは、わざわざ贈られるという行為にあると考える。

(2) ある研究会での光景から

毎回、150名近い研究会の中で、講師の先生がこだわって必ずされるプログラムがある。

それは、自己紹介である。3時間半の研修会の内、約1時間が自己紹介で費やされる。その1時間を研究会に使えるより充実したものになるというものではあるが、必ず導入としての自己紹介が持たれる。各自一人ずつ、自己紹介と会場の参加者全員から拍手をもらうシステムになっている。このことは、参加者全員に「ステージ」を与えることに他ならない。また、初めての参加者はコメントを述べる権利が与えられ、大きな拍手とともに歓迎されるしくみである。また、遠方からの参加者にも大きな拍手が送られる。このシステムは、この研究会で指導を受けた会員の他の研究会に於いても必ず行われる行為であり、一つのシステムとして確立している。これは、自己紹介という参加者に「ステージ」が準備され、参加者全員である「観客」と評価である「拍手」という構図がある。このことによって、参加者全員に参加意欲と会員のアイスブレイキングにつながっていく。この1時間はそういう意味では、決して無駄でない1時間であると考え。また、そのプログラムの中に、「ステージ理論」の構図がみられ、参加意識の向上という効果が見られると考える。

7. 5つの検証からのまとめ

教育的指導法としての「ステージ理論」を5つの観点から検証した。

- ・[検証1]学校経営の中でのステージ理論では、直接「ステージ」という言葉をあげながら、教職員にその効果や意識を調査した。また、教職員の誕生日の紹介という実践からは、経営上での「ステージ理論」の有効性を示した。
- ・[検証2]実践指導の中に見るステージ理論では、教育現場での部活動指導や団士郎氏の著

学校経営アンケート

佛教大学 杉岡 義次

前校長の学校経営についてのアンケートです。該当するところを○で囲んでください。

前校長は教職員の誕生日に、その誕生日の紹介(祝福)とプレゼントを行っていましたが、そのことについて思い返し、または一緒に働いていない人は想像して、あなたの感想をお聞かせください。

1. 前校長と一緒に働いた年数 ①[0年・1年・2年・3年・4年・5年・6年]
(平成18年度～平成23年度)
2. プロフィールをお答えください ②[男性 ・ 女性]
- ③現在の年齢[20代・30代・40代・50代]
- ④現在の教職員経験年数(講師を含む)[]年
3. 誕生日の紹介についての感じたことを述べてください
(0年の方は、自分がそのようなことを体験したとしたら、という仮定でお答えください)
- ⑤[大変うれしかった ・ うれしかった ・ 何とも思わなかった ・ 迷惑]
4. 教職員全体の中で紹介と祝福(拍手)をされてどの様に思い(感じ)ましたか (複数回答可)
- ⑥ [恥ずかしかった ・ 感動した ・ 校長に好感を感じた ・ 校長に感謝を感じた
・ 何となくがんばろうと思った ・ 教職員(職場)との一体感を感じた ・ 職場での協働意識を感じた ・ 学校に貢献しようと思った ・ 今の自分を振り返った
・ 自分の健康を感じた ・ 家族のことを思った ・ 忙しいのに無駄と思った
・ いい気はしなかった ・ 次の指導等を考えそれどころではなかった ・ 何とも思わなかった ・ その他()]

5. 前校長と仕事を共にした方にお答え願います

『すべての人にステージを』の経営スローガンについて、お答えください。

⑦該当するところを○で囲んでください(複数回答可)

- [よく分からなかった ・ 別に何ともない ・ それほど意識はしなかった ・
学級経営上少しは役だった ・ 生徒指導上少しは役だった ・ 職場において少しは役
だった ・ 少しは人生の指標となった ・ 学校経営上、組織上役だった
その他()]



ご協力、ありがとうございました。合掌

※このデータの使用に関して、個人を特定するような使用や研究以外の資料の使用は行いません。